

令和 3 年 6 月 18 日現在

機関番号：33306

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2020

課題番号：16K12070

研究課題名(和文)放射線療法中の乳がん患者へのPILテストを手がかりとした看護介入の活用可能性

研究課題名(英文) Possibilities of Utilization of Nursing Intervention based on PIL Test for Breast-Cancer Patients receiving Radiation Therapy

研究代表者

岩城 直子 (IWAKI, Naoko)

金城大学・看護学部・教授

研究者番号：60468220

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：乳がん患者に対して、Purpose in life test(以下PILテスト)をてがかりとした看護介入を実施したところ、予期的不安が軽減されることが示された。看護介入の評価面談結果から、今をどう生きるかが意識されたことで不安が軽減され、予期的不安が変化しなかったことが考えられた。看護師は、介入が患者の内面を引き出すツールとして有効であると認識していたが、放射線療法中の看護として、導入することへの抵抗もみられた。看護師がこの介入を活用するには、緩和ケアの知識やコミュニケーションスキルの獲得、マンパワーの確保が必要との意見があり、臨床での活用を可能にする教育の方向性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

外来で放射線療法中のがん患者への精神心理的問題への介入を検討した研究は少ない。今回、本介入において放射線治療中の乳がん患者の不安の軽減の一助となることが示唆された。また、患者からの評価面談から、患者が意味の探索や意味をみいだす支援として有用であることが考えられた。よって、外来で放射線療法を受ける乳がん患者の時間的制限があるという状況の中で、早期からの緩和ケアとなりうる。

研究成果の概要(英文)：Nursing interventions based on the Purpose in life test (PIL test) were performed for breast cancer patients. As a result, it was shown that anticipatory anxiety was reduced. From the results of the evaluation interview of nursing intervention, it was considered that anxiety was alleviated and anticipatory anxiety did not change because of awareness of how to live now. Nurses recognized that the intervention was an effective tool to bring out the inner side of the patient. However, there was some resistance to introducing it as nursing during radiation therapy. There was an opinion that nurses need to acquire knowledge of palliative care, communication skills, and secure manpower in order to utilize this intervention. From these, the direction of education that enables clinical utilization was suggested.

研究分野：がん看護

キーワード：放射線療法 PILテスト 看護介入 乳がん患者

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

乳がんは、女性の罹患数で第1位であり **40~60** 歳代に発症し¹⁾、かつ通院で放射線療法を実施する代表的な疾患である。そして、他のがんに比べ、心理的にも適応障害や抑うつ状態に陥る人が多い²⁾と報告されている。手術によってボディイメージが変化することで自己概念の変更を迫られること、乳房温存術後の放射線療法が、術後できるだけ早期に開始することが勧められている³⁾ことから、気持ちの整理もつかないままに、放射線療法を受けている患者も多い。このようなことから、「乳房温存療法を受ける乳癌患者の心理的適応を促進させる為には、放射線治療終了前後に患者が新たな目標を見出し、変化に対する心の準備ができるよう」支援する必要性が示唆されている⁴⁾。我々は、外来で放射線療法を受けるがん患者に対する精神心理的援助として、**Purpose in Life Tests** (以下、「**PIL** テスト」とする)を用いた看護介入プログラムを考え、介入を試みた⁵⁾。その結果、乳がん患者では、**QOL** 心理/精神得点において、開始時より終了後、終了 **3** ヶ月後に改善がみられ、**PIL** テストを手がかりとした看護介入の効果が示唆された。これらの結果から、**PIL** テストを手がかりとした看護介入は、外来で放射線療法を受けるがん患者に対する精神心理的苦痛に対するケアとなりうると考えられた。その一方で、症例数の少なさから、乳がん患者に対する有効性について更なる検討が必要であること、放射線治療部門で看護師が **PIL** テストを手がかりとした援助を容易にするために、質問内容の検討やどのような方法で行うことが適切かを検討していく必要性が課題としてあげられた。本研究では、外来で放射線療法中の乳がん患者に焦点をあて、**PIL** テストを手がかりとした看護介入の乳がん患者に対する有効性と看護師が行う精神心理的苦痛の軽減へのケアとして、**PIL** テストを手がかりとした看護介入の活用可能性について示唆を得たいと考えた。

2. 研究の目的

外来で放射線療法中の乳がん患者に **PIL** テストを手がかりとした看護介入を行なうことが、患者の精神心理的苦痛の軽減に有効かを検証すること、さらに、**PIL** テストを手がかりとした看護介入の活用可能性についての示唆を得ることを目的とする。

3. 研究の方法

1) 外来で放射線療法を受ける乳がん患者への調査

(1) 研究期間：2017年1月～2019年4月

(2) 研究対象：A 病院に通院して放射線療法をうけている乳がん患者で、会話が可能、病名・病状の告知がされている、はじめて放射線療法を受ける患者とし、介入群と対照群の調査は期間を決めて行う。

(3) 介入群への看護介入プログラム：放射線治療開始時に **PIL** テストを実施し、記述された内容を手がかりに人生観(「人生観」「病気・苦悩観」「死生観」「自殺観」)をイメージしやすいように作成した図を提示し、「過去」「現在」「未来」の時間軸に基づいて対話する。面接時間は **30** 分を目安とする。

(4) 介入の効果の評価：**Quality of Life Radiation Therapy Instrument** (以下、**QOL-RTI**)⁶⁾ 日本語版、**Mental Adjustment to Cancer** 日本語版⁷⁾ の質問紙記載と、介入群への半構造化面接で行う。

(5) データ収集方法

放射線治療センター看護師から紹介された患者に研究者が口頭と文書で研究の説明を行い研究参加の同意を得た後、質問紙調査を行う。調査は **3** 時点(放射線治療開始時、終了時、終了 **3**

か月後)で行う。看護介入の感想について、介入群の患者に、治療終了 3 ヶ月後、半構造化面接を実施する。

(6) 分析方法

両群間比較では、**QOL - RTI** 日本語版、**MAC** 日本語版は治療開始時と治療終了時、治療終了後 3 ヶ月について 2 要因 (2×3) 分散分析を行う。

介入群の患者のインタビュー内容は、質的帰納的に分析し、カテゴリー化する。

2) 放射線治療センターに配属されている看護師への調査

(1) 研究期間：2017 年 1 月～2019 年 4 月

(2) 研究対象：本看護介入の場面に同席した看護師とする。

(3) データ収集方法

看護介入の場面に同席した感想や看護介入に関する評価について、半構造化面接を実施する。

(4) 分析方法

逐語録を基に質的帰納的に分析し、カテゴリー化する。

【倫理的配慮】

石川県立看護大学倫理委員会、金城大学倫理委員会及び調査協力施設の倫理委員会の承認を得て行った。

4. 研究成果

<外来で放射線療法中の乳がん患者への P I L テストを手がかりとした看護介入の効果>

1) 対象者の概要

介入群 15 名(平均年齢 51.6±14.8 歳)、対照群 15 名(平均年齢 58.0±10.6 歳)を分析対象とした。

(回収率 100%、有効回答 95%)。両群の基本属性(年齢、照射量、職業、婚姻、子供、居住形態、病期)に偏りはなかった。

2) QOL と心理的適応への効果

QOL - RTI の 2 要因分散分析では、**QOL** 総得点および **QOL** 下位概念に有意差はなかった。

MAC の 2 要因分散分析では、**Anxious Preoccupation**(予期的不安)得点において、交互作用が見られた($F(2,56)=2.44, p < .10$)。対照群における時期の単純主効果が有意であり($F(2,56)=3.85, p < .05$)、多重比較(**Bonferroni** 法)の結果、有意ではなかった。対照群では開始時より終了時の予期的不安が高くなり、3 か月後には低下するパターンを示し、介入群では予期的不安の時期の違いがみられなかった。**MAC** 日本語版の **MAC Fighting Spirit**(前向きな態度)得点、**MAC Fatalism**(運命論的態度)得点については、時期の主効果が有意であり、(それぞれ $F(2, 56)=6.91, p < .01$; $F(2,56)=4.49, p < .05$)。多重比較(**Bonferroni** 法)の結果、3 ヶ月後が開始時よりも低い得点を示した。**MAC Helpless/Hopeless**(絶望感)得点は、介入の主効果が有意であった($F(1, 28)=4.41, p < .05$) 介入無しの方が介入有りよりも高い得点を示した。

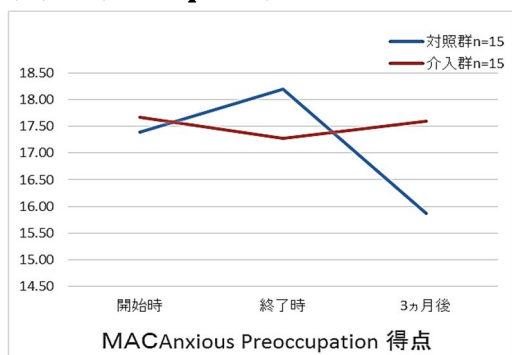


図 1 **Anxious Preoccupation** 得点

3) 介入群の放射線療法終了 3 か月後の面接結果

[]はカテゴリーを示す

対象者は、**13**名で平均年齢 53±15.5 歳、面接時間は平均 19.4±8.5 分であった。対象者のインタビューから、看護介入の評価として、**34**のコードが抽出された。それらは、[自己洞察の機会]、[語ることで楽になる] [病気の認識] [目的を意識化] [変化がない]という **5** カテゴリーにまとめられた。

4) 考察

今回の介入により、**QOL** 心理 / 精神への影響がみられなかったことには、介入群の絶望感の低さが関与していることが考えられた。対照群の予期的不安が治療中増すパターンに比較し、介入群では変化がみられなかった。看護介入の評価で「目標を意識化」にみられたように、**PIL** テストを記載し、対話したことによって自分なりの過去を意味づけ、今をどう生きるかが意識されたことによって、病気を抱えて生きることへの不安が軽減され、予期的不安が変化しなかったことが考えられた。また、**PIL** テストを用いることで患者の生き方が可視化され、それによって、自己距離化が図られ、混沌とした中で思考の整理がなされている様子が伺えた。また、辛い状況にあっても対話によって人生への意味付けがされている様子も伺え、看護介入をきっかけに語ることで辛さを軽減する機会となっていた。看護師が、放射線治療通院中の短い滞在時間の中で効果的に実施できる心のケアとして有用であることが示唆された。

< **PIL** テストを手がかりとした看護介入に対する看護師の評価 >

1) 対象者の概要

対象者は **4** 名であった。年齢は **40** 代 **3** 名、**60** 代 **1** 名であった。

2) 看護介入に対する評価

[]はカテゴリーを示す。

看護介入に同席してもらった看護師からの評価として、[患者理解が促進される][患者への利益がある][治療室看護の範疇ではない][マンパワーとスキルが必要][患者対応に戸惑いが生じる][ツールによって踏み込んだ関わりができる]にまとめられた。

3) 考察

看護師は、この介入が患者の内面を引き出すツールとして有効であると認識していた。しかし、放射線療法中の看護として、患者の生き方にかかわる必要性には賛否がみられ、導入することへの抵抗もみられた。一方で、看護師がこの介入を活用するには、緩和ケアの知識や患者の思いを引き出すコミュニケーションスキルの獲得、マンパワーの確保が必要との意見があり、臨床での活用を可能にする教育の方向性が示唆された。

引用文献

1) がん研究振興財団がんの統計¹⁵

http://ganjoho.jp/data/reg_stat/statistics/brochure/2015/cancer_statistics_2015_date_J.pdf,
63 (参照 **2016-06-04**)

2) 唐澤久美子, 堀川直史, 関香織, 他 5 名: 放射線療法を受けた乳がん患者の不安・抑うつとその対応, 乳癌の臨床, **18** (**3**), **20-27**, **2003** .

3) 日本乳癌学会. 『乳癌診療ガイドライン』,

<http://www.jbcsftguideline.jp/category/cq/index/cqid/300501> (参照 **2015-01-02**)

4) 佐藤 まゆみ, 佐藤 禮子: 乳房温存療法をうける乳がん患者の術後 **1** 年間の心理的变化,

千葉看護学会会誌, **8(1)**, 47-54, 2002.

5) 岩城直子, 牧野智恵: 外来で放射線療法中のがん患者への**Purpose in Life Test**を手がかりとした看護介入の効果. 日本がん看護学会誌, **29(2)**, 43-53, 2015.

6) 佐々木武仁: 放射線治療における **QOL** 評価法の確立に関する研究(最終報告) 頭頸部腫瘍について, 日本放射線腫瘍学会誌 **14(3)**, 181-184, 2002.

7) **Akechi T, Fukue-Saeki M, Kugaya A, Okamura H, Nishiwaki Y, Yamawaki S, Uchitomi Y: Psychometric properties of the Japanese version of the Mental Adjustment to Cancer (MAC) scale. Psychooncology. 2000 Sep-Oct;9(5):395-401.**

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 岩城直子 奥野恵
2. 発表標題 放射線療法中の乳がん患者へのPILテストをてがかりとした看護介入の効果の検討
3. 学会等名 日本がん看護学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 奥野恵 岩城直子
2. 発表標題 放射線療法中の乳がん患者へのPILテストを手がかりとした看護介入の効果 治療終了後の評価面談の分析からー
3. 学会等名 日本がん看護学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------